都留文科大学大学院紀要　第22集（2018年３月）
THE TSURU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL REVIEW,
No.22（March, 2018）

「障碍と生」の経験と生き直す自己
―ある養護学校卒業生の語る人生の物語―

Experience of Life with Disabilities and “Self” Surviving:
Life Story Told by a Young Person who Graduated from School for Special Needs Education

森　博俊
Hirotoshi MORI

【要旨】

ここでは養護学校高等部を卒業した１人の若者（30代前半、女性）の「障碍と生」の物語を、当事者の生い立ちや境遇についての語りを元に記述し、その生きられた経験の意味を解釈した。人生の物語は、①孤立しがちであった子ども期、②「障害児教育」コースに移行した時期、③高等部卒業後生育の地を離れ、生き直そうと決意した時期、④新しい人間関係のなかに家族的な親密圏を確保していった時期、⑤障碍者介護の仕事に就き「自己」のイメージをつくり直していった時期などの柱に沿って記述した。

その結果、子どもの頃の生存基盤を断ち生き直すときの不安に対処するために、形式的枠組みであっても家族的人間関係の構築が不可欠であったこと、様々な対人関係を経験し、これと相互的に「自己」のイメージ（対象的自己意識）を構成してきたことなどが浮かび上がった。また、自分の「障害」を意識しない日常を生きる半面、障碍とともに生きた子どもの頃の経験に向けられる他者のまなざしには過敏に反応する自己感をとどめていた。

これらの「障碍と生」の経験は、当事者の主観世界に注目した子ども理解のあり方を開示する一方、特定の１ケースではあるが、「自己」の発達に関わる典型例として、教育実践を省察するときの参照枠の意味をもつと考える。

【キーワード】 知的障害、障碍と生、経験の語り、自己の発達、ライフストーリー